

## チャールズ・ディケンズの母親像

篠 三知雄

### 1

芸術家の感受性は両刃の剣といえる。その切れ味が鋭ければ鋭いほど、それはより大きな長所であると同時に短所にもなりかねない。例えば、『ジェイン・エア』の赤い部屋の閃光の挿話もロチェスター氏の悲痛な叫び声を物理的に不可能な地点でジェイン・エアが聞いた事も、作者シャーロット・ブロンテはすべて「真実」といつている。それは特異な才能に恵まれた人へののみ起りうるこの世の不可思議な現象の好例ともなるし、途方もない虚言ともなりうるのである。

英国ヴィクトリア朝の代表的作家チャールズ・ディケンズの場合も同様の事例はいくらでも見い出される。彼の手紙や思い出を書いた文章には‘never’とか最上級の表現が多い。初恋の人マライア・ビードネルについては、‘I have never loved and I can never love any human creature breathing but yourself.’<sup>1)</sup>といい、後年彼女に再会した彼は幻滅し、その体験を『リトル・ドリット』の中で利用している。当時婚約中だった妻のキャサリンへの手紙の末尾には、99に0を39加えた天文学的数字の接吻を与えている<sup>2)</sup>。また、‘I have never ceased to love you for one moment, since I knew you; nor shall I.’<sup>3)</sup>といったが、後年妻とは結婚後間もなく気が合わなくなってきていたと述べて<sup>4)</sup>、22年後に離婚している。若くしてこの世を去った義妹メアリーについては、‘I solemnly believe that so perfect a creature never breathed.’<sup>5)</sup>といい、彼女への愛惜は異常なほどであり、‘マリア信仰’といってもよいものであった。

出世作『ピックウィッククラブ遺文集』については、つぎのようにいつている。

“If I were to live a hundred years,” he wrote Chapman and Hall on 1 November 1836, “and write three novels in each, I should never be so proud of any of them as I am of Pickwick, feeling as I do, that it has made its own way, and hoping, as I must own I do hope, that long after my hand is as withered as the pens it held, Pickwick will be found on many a dusty shelf with many a better work.”<sup>6)</sup>

初期の作品はもとより、中期の作品に分類されている半自伝的小説『デイヴィッド・コパーフィールド』にもこの種の表現が多くある。デイヴィッドが義父マードストンの手に噛みついた時、こらしめのために5日間物置部屋に閉じ込められたが、それはデイヴィッドには「5年間」のように思えたし<sup>7)</sup>、ペゴティ氏が愛するエミリーの駆け落ちを知った時の表情の変化はデイヴィッドが50才まで生きても忘れられないものであったという<sup>8)</sup>。また、グレイ法学院に事務所を持ち、妻の姉妹たちと一緒に暮らすトラドルズの家を見て、主人公は何千のばらよりも明るいと思った。ドーラを一目見た主人公は電流に打たれたも同然だった。

All was over in a moment. I had fulfilled my destiny. I was a captive and a slave. I loved Dora Spenlow to distraction!<sup>9)</sup>

そして、後にこれを‘my headlong passion’<sup>10)</sup>と呼び、悔やんでいる。

記者時代の取材の苦勞についても、1845年に友人のジョン・フォースターにつきのように書いた。‘There never was... anybody connected with newspapers who, in the same space of time, had so much express and post-chase experience as I.’<sup>11)</sup>さらに20年後の1865年5月、新聞社基金の第2回年次夕食会での演説ではつきのように語ったという。

I have pursued the calling of a reporter under circumstances of which many of my brethren here can form no adequate conception. I have often transcribed for the printer, from my shorthand notes, important public speeches in which the strictest accuracy was required, and a mistake in which would have been to a young man severely compromising, writing on the palm of my hand, by the light of a dark lantern, in a post-chase and four, galloping through a wild country, and through the dead of the night, at the then surprising rate of fifteen miles an hour. ... I have worn my knees by writing on them on the old back-row of the old gallery of the old House of Commons; and I have worn my feet by standing to write in a preposterous pen in the old House of Lords, where we used to be huddled together like so many sheep—kept in waiting, say, until the Woolsack might want re-stuffing.<sup>12)</sup>

狭い記者席で膝が痺れるほど筆記し、地方取材後疾駆する馬車の中で夜を徹して記事を書くことは容易なことではないし、大『タイムズ紙』を向うにまわしての特だね合戦でディケンズが勝ったことは立派だが、同じ経験をしていた人は他にもいたはずである。アンガ

ス・ウィルソンの『ディケンスの世界』の同演説には「イギリス国内の多くの同輩、また私の多くの後輩たちにはとうてい見当もつくまいと思う」<sup>13)</sup>となっている。やや独りよがりな気がする。

12才足らずで靴墨工場で働らかされた件にしても、もちろん期待に反した辛い経験であったに違いないが、当時の社会の仕組、生活状態からすれば特異なことではない。事実同じ工場に同年代の子どもが働いていた。その子たちに特にいじめられた訳ではなく、それどころか‘young-gentleman’<sup>14)</sup>と呼ばれ、むしろ優遇されていたとさえいえる。しかし、チャールズ少年の悲しみはあまりに大きく、その世界になじもうとせず、友人の親切をも侮辱と受けとり、恨み、この経験を家族にさえ語らなかつたという。モームは『十の小説とその作家たち』の中で、その経験を他人に知られることを恐れたことに首を傾げた後、つぎのようにいっている。

As his imagination went to work on his recollections, he was filled, I suspect, with pity for the little boy he had been; he gave him the pain, the disgust, the mortification which he thought he, famous, affluent, beloved, would have felt if he had been in the little boy's place. And seeing it all so vividly, his generous heart bled, his eyes were dim with tears, as he wrote of the poor lad's loneliness and his misery at being betrayed by those in whom he had put his trust. I do not think he consciously exaggerated; he couldn't help exaggerating: his talent, his genius if you like, was based on exaggeration.<sup>15)</sup>

ディケンズの誇張について、ジョン・ラスキンはつぎのようにいっている。

The essential value and truth of Dickens's writings have been unwisely lost sight of by many thoughtful persons, merely because he presents his truth with some colour of caricature. Unwisely, because Dickens's caricature, though often gross, is never mistaken. Allowing for his manner of telling them, the things he tells us are always true.<sup>16)</sup>

また、デイヴィッド・セシルは『初期ヴィクトリア朝の作家たち』の中でいっている。

He overstates. He tries to wring an extra tear from the situation; he never lets it speak for itself. One would have thought the death of an innocent and virtuous child should be allowed to carry its own emotion; but Dickens cannot trust us to

be moved by little Nell's departure from the world unassisted by church bells, falling snow at the window, and every other ready-made device extracting our tears that a cheap rhetoric can provide.<sup>17)</sup>

ヘンリー・ジェームズやジョージ・エリオットのディケンズ批判もこのあたりにある。

これに対して作者は読者の批判に答えて、『オリヴァー・トウィスト』第3版(1841)の序文で、ナンシーについていったごとく、'IT IS TRUE'<sup>18)</sup>と叫ぶであろう。さらに『マーティン・チャズルウィット』1868年のチャールズ・ディケンズ版の序文でもつぎのようにいっている。

What is exaggeration to one class of minds and perceptions, is plain truth to another. That which is commonly called a long-sight, perceives in a prospect innumerable features and bearings non-existent to a short-sighted person. I sometimes ask myself whether there may occasionally be a difference of this kind between some writers and some readers; whether it is *always* the writer who colours highly, or whether it is now and then the reader whose eye for colour is a little dull?<sup>19)</sup>

ディケンズも、シャーロット・ブロンテ同様自分の描くすべての人物・場面は真実であるといいたいのである。

これは、ディケンズについてよくいわれるもう1つのいい方、'子どもの視点'と深い関係がある。彼の友人で、伝記作者でもあるフォスターはつぎのように語っている。

But my experience of him led me to put implicit faith in the assertion he unvaryingly himself made, that he had never seen any cause to correct or change what in his boyhood was his own secret impression of anybody, whom he had, as a grown man, the opportunity of testing in later years.<sup>20)</sup>

これが、チャールズ・ディケンズ、特に初期のディケンズなのである。そこから、ピックウィック氏、サム・ウェラー、オリヴァー、フェイギン、ナンシー、ニコラス、ニクルビー夫人、ネル、ドンビー氏、フローレンス、スクルージ、デイヴィッド・コパーフィールド、ドーラ、ミコーバー氏、ミコーバー夫人が生まれ出て、記憶に残り、今も人々を楽しませてくれる場面が生まれたのである。つぎのジョージ・サンタヤナの言葉はディケンズ理解に大いに参考になる。

When people say Dickens exaggerates, it seems to me they can have no eyes and no ears. They probably have only *notions* of what things and people are; they accept them conventionally, at their diplomatic value. Their minds run on in the region of discourse, where there are masks only and no faces, ideas and no facts; they have little sense for those living grimaces that play from moment to moment upon the countenance of the world.<sup>21)</sup>

## 2

チャールズ・ディケンズの作品は、彼の人生のそれぞれの時期を示していて、いずれも捨て難いものばかりなのだが、これらの作品群を形成するに力のあった重大な出来事がいくつもある。彼が父親の勤務の都合でチャタム、ロチェスターといった比較的近いとはいえロンドンでない田舎町に育ったこと、父の経済観念の欠除から生じた種々の体験と屈辱、母方から継承したと思われる物真似上手・話上手と演劇への関心と才能、新聞記者時代に育てられたと思われる社会に向けられた眼と改革熱、彼の家庭とクリスマス賛美、そして、女性関係も大事な事の1つといえる。

女性問題は、ディケンズの場合、一般の人のものと大差ない。それは特別なものではなく、母、姉妹、恋人、妻、娘に対するもので、誰もが体験するものである。社交好きで有名人であったから、多少その数が多いとか、感受性が鋭かったので烈しかったとか、作家という仕事上その経験が作品に形を変えつつ示されたとかが少し違うといえる。初恋の人マライア・ビードネル、妻キャサリン、義妹メアリーとジョージーナ、晩年の恋人エレン・ターナン、その他、折々に出会い、観察できた人たちを多く愛し、少し憎んだ。

その憎んだ人の中に自分の母エリザベスがいる。多くの人にとって母は愛すべきもの、慕わしいものとして意識されるのであるが、チャールズの場合、現実の母は好ましからざるものの中に入っている。憎んだとはいえ、母と子であるから、すべてを憎み合ったのではなく、よくあるようにほんの一部分を憎んだに過ぎないが、鋭敏なチャールズは大きく、強烈に受けとめた。これは作品にも反映されていて、大切な要素になっている。そして、それは一転して、理想の母親像を生んでいる。現実の母、作者によって受けとめられた母、理想的な母がいかなる姿であるかを見ることはディケンズ作品を理解する上で大切な要素なのである。

ディケンズの母エリザベスの肖像でよく見られるのは、20代中ごろの肖像画と70才ごろのものと思われる写真である。前者は夫ジョンの肖像画の作者と同じで、ジョン・W・ギルバートという人物によって書かれている。ただし、ジョン・W・ギルバートという画家

は不詳で、ジョン・F・ギルバートという人物は1813~16年ごろポーツマスに居住していたので、ジョン・ディケンズ夫妻のポーツマス在住期と重なり、これが二人の肖像の作者と考えられているようである。その肖像のエリザベスの顔は、面長で、瘦せていて、くぼんだ目に、薄い唇というもので、年令より老けて見え、軽薄な、派手好みという印象を与え、好感が持てない。これは画家の力量に関係しているかも知れない。夫ジョンの肖像も全体がゆがんだ感じで、口のすばまった、だらけた感じを与えるもので、晩年の胸像に感じられる楽天的な、人のよさは感じられない。一方、晩年の椅子に坐ったエリザベスの写真は、目元が涼し気で、聡明さを感じさせ、可愛らしい、上品な年寄で、若い時の美しさを思わせる顔だちである。他にクラークソン・スタンフィールドの水彩画がある。彼はディケンズの「クリスマスもの」の何枚かの挿絵を描いた画家であるから、この肖像画もこの頃のものと思われるので、50代後半のものだろう。顔だちは同じく面長で、目はくぼんだ感じはするが、相当の美人で、貴婦人的印象を与えるものである。高名な作家の母とはいいながら、妻キャサリン、義妹ジョージーナ、初恋の人マライアの中年期ウインター夫人と比べても、また、このころ返済のあてのない借金をあちこちにつくり、その度に息子に後始末をさせた男の妻としては、いささか派手過ぎる感じがする。

チャールズ・ディケンズの母エリザベスは、1789年生れで、1809年の結婚当時 'a small, pretty girl of nineteen'<sup>22)</sup>であり、腰のくびれた、すらりとした美人であったという。彼女の父はブリストルで楽器製造販売にたずさわった後、音楽教師を経て、1801年40才ごろ、対ナポレオン大同盟で対応に忙しい海軍省に入り、財務管理主任(Chief Conductor of Money)の役職につき、チャールズの父ジョンの上司であった。そのエリザベスの父は、彼女の結婚後間もなく、数年間にわたり6000ポンド近い公金横領が発覚し、大陸へ逃亡、後に司法権の及ばぬマン島で暮した。年収200ポンドあれば普通の生活ができ、400ポンドあれば召使いを何人が雇う裕福な生活ができた時代であったから、エリザベスの娘時代の父の生活は羽振りのよい、華やかなものであり、ジョン夫婦も暫らくその恩恵に浴したことであろう。エリザベスは長女ファニーのピアノの手ほどきをし、チャールズにはデイヴィッド・コパーフィールドの母のごとく読み書きを教え、読書の楽しみを吹き込み、後に家計が苦しくなると私塾を開くことを思いつかせたのであるから、当時の女性としては可成りの教育を受けたと考えられる。また、彼女の親戚にはかなりの身分の人もいて、兄弟も海軍省や新聞界で活躍した。

エリザベスが、快活で、話上手で、物真似上手であったことは、何人かの人によって、また、夫が服役中刑務所内の人物や出来事を面白おかしく話してくれたことをチャールズ自身によっても語られているが、長女が音楽学校へ進み、チャールズや弟の物真似上手、そして、演劇への関心の深さによっても肯首できることである。彼女はまたパーティ好きで、ダンス好きであったことは、チャールズが生まれた夜パーティに出席し、帰って間も

なく産気づいたという、やや軽率な行為によっても知られる。また、ある目撃者によって、50才過ぎても、有名になった息子の目を気にしつつ、ダンスを楽しんだことが伝えられている<sup>23)</sup>。そもそも、夫ジョンとの馴れ染めは、華やかな生活をしてきた父の催すパーティの席に兄の友人として出入したことによるものであり、結婚も親の同意を必要とする20才前の結婚で、駆け落ち同然のものであったという。チャールズの父ジョンは、名門貴族とはいえ、その召使い部屋生れで、小さい時は‘怠け者’で、母親の心配の種であり、成長しては紳士気どりを身につけ、収入不相応な生活を楽しみ、周囲の人から借金をし、その習慣は改まることがなかった。こうしたことを考えるとチャールズの両親の生活は、やや上すべりの、軽薄なものであったことは間違いない。

しかし、単にそれだけの夫婦であるならば一家は離散していたはずである。生活維持のため何度も引越しを余儀なくされ、その度に生活水準は下った。妻の口から文句不平は出たであろうが、夫婦別れはなかった。エリザベスの実家や縁者との疎遠は夫ジョンの繰返しの借金のためであり、恐らく周囲からは何度も離婚はすすめられたことであろう。別れていれば、実家や親戚の援助が得られて、より裕福な生活ができたかもしれない。しかし、エリザベスはその道を選ばなかった。ミコーバー夫人同様、夫を捨てなかった。

ジョンの胸像を作ってくれたサムエル・ヘイドンに、主人ほど私心のない人はいないとエリザベスは手紙に書いたという。この点はチャールズも同意見であった。

I know my father [...] to be as kindhearted and generous a man as ever lived ... Everything that I can remember of his conduct to his wife, or children, or friends, in sickness or affliction, is beyond all praise. By me, as a sick child, he has watched night and day, unweariedly and patiently ...<sup>24)</sup>

また、エリザベスも貧しい中で多くの子を育て、遣り繰り算段をした。持物や家財道具を古道具屋や質屋へ持って行かねばならない生活の中で、12才にならないとはいえ、チャールズの働き口があった時、それも親戚筋の者で、息子の勉強を見てくれるという条件の場合、それにすがりついたのは当然といえる。失敗し、後に息子チャールズの嘲笑を買ったとはいえ、私塾を開いて家計を建て直そうともした。チャールズの働く工場へ何度か足を運び、様子を見に行っただけのも、その一部には息子を気づかう親心があったからであろう。その間、夫ジョンは債務事務所へ入れられる最悪の事態におちいり、運よくジョンの母の遺産で出所できたものの、いつ同じ状態になるかもしれず、夫が息子の衆人環視の中の作業姿を見て腹を立て、仕事をやめさせようとした時、それをとりなし、チャールズに仕事を続けさせようとしたことは5人の子を抱えた家計をあずかる主婦として当然であったといえる。しかし、このために彼女は一生恨まれることになったのである。

その後も彼女は息子の就職に力を貸している。しばらく学校へ通ったチャールズに法律事務所の給仕の働き口を見つけてきたのもこの母であり、また、チャールズ自身の努力があったとはいえ、民法博士会の記者の仕事も『ミラー・オブ・パーラメント』紙の記者の仕事も彼女の縁者の盡力によるものであり、さらに、出世の舞台となった『モーニング・クロニクル』紙へも、その時は効を奏さなかったが、母の縁者が紹介の労をとっている。エリザベスは息子が将来大作家になることを見越せなかっただろうが、とにかく息子チャールズの行末を心配し、できる限り力添えをしたことは認めねばなるまい。息子チャールズがどう受けとろうが、子を見放したというのは見当外れといえる。

夫ジョンが何度か経済的危機に見舞われ、チャールズによって田舎へ引込むことによって家計を建て直そうとした時、数カ月したばかりで、息子に苦情をいってきたりしたこと、年をとってもおしゃれをしたこと、老化の進んだある時母を訪れたチャールズにいきなり手を出し1ポンドのお金を請求したことなどは事実あったことだが、いずれも息子が大成した後のことであり、あまり厳しく批判することは酷であり、彼女の母としての価値を下げるものではない。

### 3

チャールズは親戚の者が自分を靴墨工場で働かせるように申し出た時、父母が喜んでその申し出を受け入れたことを、つぎのようにいっている。

It is wonderful to me how I could have been so easily cast away at such an age. It is wonderful to me that, even after my descent into the poor little drudge I had been since we came to London, no one had compassion enough on me—a child of singular abilities; quick, eager, delicate, and soon hurt, bodily and mentally—to suggest that something might have been spared, as certainly it might have been, to place me at any common school. . . . No one made any sign. My father and mother were quite satisfied. They could hardly have been more so, if I had been twenty years of age, distinguished at a grammar-school and going to Cambridge.<sup>25)</sup>

No words can express the secret agony of my soul as I sunk into this companionship; compared these everyday associates with those of my happier childhood; and felt my early hopes of growing up to be a learned and distinguished man crushed in my breast.<sup>26)</sup>



ここには確かに希望を打ち砕かれた少年の悲しみがある。しかし、10才前後の子どもはみな「微妙で、傷つき易い」ものであり、「特別な才能をいくつも持った子ども」である自分に誰一人同情を示さなかったというのは、モームのいうごとく、有名な作家となったチャールズの感情が多分に入っている。その時自分だとてどんな才能があるか分らなかったろう。多少、頭がよいとか、物真似が上手だとかいう意識はあっても、才能は開花してみなければ本人にもわからないものである。父のジョンが抗議の手紙を書き、チャールズが解雇されたあと、なおも母親が仲裁し、チャールズを働かせ続けようとしたことについてはつぎのように記している。

My mother set herself to accommodate the quarrel, and did so next day. She brought home a request for me to return next morning, and a high character of me, which I am very sure I deserved. My father said I should go back no more, and should go to school. I do not write resentfully or angrily: for I know how all these things have worked together to make me what I am: but I never afterwards forgot, I never shall forget, I never can forget, that my mother was warm for my being sent back.<sup>27)</sup>

「腹を立てていない」とは言っているが、やはり腹を立てているし、恨みさえしている。家計全体への配慮は生まれてなく、あくまでも自分中心で、自分の努力は書き込んでいる。父はともかく、母の努力についてはもっと言及されるべきであろう。「自伝的断片」は大成した分別盛りになってから書かれたことを考えると片手落ちの感はまだぬがれない。

同趣旨のことは『馮かれた男』(1848)で、主人公レッドローの亡霊に語らせている。

"Look upon me!" said the Spectre. "I am he, neglected in my youth, and miserably poor, who strove and suffered, and still strove and suffered, until I hewed out knowledge from the mine where it was buried, and made rugged steps thereof, for my worn feet to rest and rise on." . . . "No mother's self-denying love," pursued the Phantom, "no father's counsel, aided *me*. A stranger came into my father's place when I was but a child, and I was easily an alien from my mother's heart. My parents, at the best, were of that sort whose care soon ends, and whose duty is soon done; who cast their offspring loose, early, as birds do theirs; and, if they do well, claim the merit; and, if ill, the pity."<sup>28)</sup>

さらに、ひき続き書かれた、半自伝的小説『デイヴィッド・コパーフィールド』(1851)

において、主人公デイヴィッドに、ほぼ同じ運命を背負わせている。多くの批評家が指摘しているように、彼の主要作品の主人公、脇役とも、両親または片親のいない孤児が多い。また、子どもの世話をすべき親の立場の逆転、即ち、親またはそれに代る者の世話をしなければならぬ子どもがよく登場する。『ニコラス・ニクルビー』の兄妹、『骨薫店』のネル、『ドンビー父子』のフローレンス、『コパーフィールド』のアグニス、『リトル・ドリット』のエイミー、『共通の友』のジェニー・レン等である。これらはすべて女性であるが、作者自身の体験から出ているというのは正しいだろう。実人生においては、こうした現象はいずれ起ることであり、子が老いた親を世話するのが当然であるのだが、チャールズにはこうした現象が早く起ったために、異常な人間関係として受けとられ記憶されてしまったのである。並外れた感受性と傷つきやすい、そして、自己中心的で、我の強いチャールズには忘れられない、いまわしい人間関係となったことは不幸なことであった。

『オリヴァー・トゥイスト』のオリヴァーは母親が行き倒れて保護された救貧院で生れ、母は間もなく息を引きとった。父はそれ以前に外国で他界しているので、全くの独りである。救貧院、養育院では母親の代りをしてくれる人はいなかった。オリヴァーはピカレスク小説の落し子であり、名ばかりの新救貧法や大都市ロンドンの悪の巣窟批判の手段として作り出されたものであるから、母親は不要であり、むしろ、いてはならなかった。とすれば、ディケンズの母親像の出る余地はここにはない。オリヴァーの心にあるのは何ら具体的な母親像ではなく、自分を存在させてくれた、直観的、本能的な母親像にすぎない。徒弟奉公先で先輩に母を侮辱されて許せず、無我夢中で殴りかかったのは、自分でも分らない母親像を掴むためであった。助けられた家の壁にかけられた若い女性の肖像画に心ひかれたのも、空虚な母親像を具体化するための本能的な行為であった。

『ニコラス・ニクルビー』のニクルビー夫人は作者自身が友に語った言葉によって自身の母親像であることが暗示される。'Mrs. Nickleby herself sitting bodily before me... once asked whether I really believe there ever was such a woman!'<sup>29)</sup>また、1868年の『マーティン・チャズルウィット』のチャールズ・ディケンズ版の序文にある、つぎの言及は同一の事実を述べていると思われる。

I have never touched a character precisely from the life, but some counterpart of that character has incredulously asked me: "Now really, did I ever really, see one like it?"<sup>30)</sup>

ニクルビー夫人は英国南西部デボンシャーの下級紳士の娘で、善良な、世慣れぬ夫に多くの人がやっているという理由で投機を勧め、わずかな財産を失ったばかりでなく、夫をも失ってしまった。彼女はそれを心から悲しんだものの、すぐ他人を頼り、自分は迫害を

受けた聖人のごとき犠牲者と思いこんでしまう、彼女は 'a well-meaning woman enough, but rather weak withal'<sup>31)</sup>である。彼女の多弁は止まるところをしらず、その内容の脈絡のなさは果てしない。また、世間知らずの空想は果てしなく広がる。娘が小さな帽子屋のお針子として雇われれば、この愚かな母はすぐ娘が主人と共同経営者になることを思い描き、息子のニコラスがインチキ学校の教師になるとすぐ学校長になった時のことを考える。娘が強欲な義兄の商売道具として食事に招かれると、伯父の遺産相続やその席で知り合うと思われる金持との縁談を思い、そこへ身につけて行く宝石のないことを悔み、夫を恨むのである。客が来ると誰だろうと大騒ぎをすると同時に、銀食器のないことを嘆く。放蕩貴族たちが情欲の対象として娘に関心を示しているのに、その真意に気づかず、娘が貴族夫人となった姿を夢見る。

夫人の虚栄心と世間知らずな人の好きは隣家の気のふれた老人との関係において頂点に達する。娘の困惑を無視して、老人の求婚や駆け落話に一応は拒みつつも心を動かし、いよいよその狂気を悟ると、発狂の原因が自分への恋慕であると気の毒がり、周囲をあきれさせる。そして、他の女性の幸福な結婚を許せず、嫌悪を隠せない。また、身分地位が劣ると思う者へは好意が持てず、スマイクの名はなかなか憶えられない、憶えようとしなない。この部分は初恋の人マライアの母が作者の名をいつまでも 'Dickin' と呼び、正確な名を呼んでもらえなかったことの仇討ちをしている。

しかし、このニクルビィ夫人は子どもたちの幸福を心から願い、娘が身分違いの求婚を断らねばならないことを嘆き、息子ニコラスの風の便りの行状に心を痛み、息子の正しさを信じたのである。そして、夫人の盡力によってではなかったが、娘は倅せな結婚をし、息子はチアブル兄弟の善意のお蔭で共同経営者となり、世に出ることができた。これによって、見当外れの努力ではあったが、ニクルビィ夫人の願いは叶えられたといえる。

ニクルビィ夫人のあるいくつかの性質はミコーバー夫人も共有している。ロンドンの北はずれのうらぶれた街で、家計の必要上下宿人をおいているミコーバー夫人は、乳呑児を抱え、世帯やつれし、老けこんでいる。夫ミコーバー氏は志はあるものの実体が伴わず、幸運の女神にも見放されて、定職なく、常に破産の危機にさらされている。夫人はそうした逆境にあっても 'I never will desert Mr. Micawber.'<sup>32)</sup>という言葉を経文か呪文のごとく唱えつつ夫につき従い、時には文句をいいつつ夫の手助けをしようと私塾経営を思いつたが、これも失敗で、なおいっそう経済的に行き詰まる。他人の持物、名儀までも利用しても事情は好転せず、とうとうロンドンを逃げ出し地方に行けば何とかなると楽天的に考えて夫人の実家のある田舎町へ行くが、仕事は見つかるどころか、ミコーバー氏の刑務所入りの前歴が知れると町の人はずっとより、身内の者までがミコーバー一家を邪魔扱いし、再びロンドンへ変名で舞い戻るはめになる。それでいてこの夫婦はのんびりしていて、時には苦境を呪い、泣き叫ぶこともあるが、それをすぐ忘れてしまい、少し手持のお金がある

と無計画に使ってしまう。夫人は夫の才能を疑わず、ある時は商才があると思ひ、ある時はその文才をほめる。そして、ちっぽけな法律事務所に雇われると、夫は法律関係の才能を持っていると信じ、夫人流の一方的な質問を発しつつ、判事、大法官にでもなれる気になってしまう。このあたりはニクルビィ夫人と同じだが、ミコーバー夫人は苦しい生活をしてきただけに、お高くとまった、見栄っぱりなところが少ない。

夫が夫人の実家の人たちの冷遇に腹を立てて、彼らを下劣な俗物呼ばわりした時、夫をたしなめ、双方とも夫の借金が原因で誤解しているのだと健全な状況判断を下すこともある。小さいコパーフィールドの差し出す金を厚意に感謝しつつ受け取らない分別もある。彼女の故郷を離れた淋しさ訴える言葉には、しみじみとした哀感がある。そして、さらに遠くオーストラリアまで夫に付き従い移民して行く。ミコーバー氏は作者の父ジョンを写した人物として有名だが、この2人は脇役とはいいいながら、デイヴィッドの成長にかかわりを持ちつつ、この世の生活の苦しさをまざまざを見せてくれて、ディケンズの小説群の中でも印象深い存在となっている。

『共通の友』のウィルファ夫人となると生活苦は骨の髄まで入りこみ、心まで毒してしまっている。彼女は背が高く、やせぎすで、不平いっぱいである。自分で善良さだけが取り得の夫を選択したにもかかわらず、それを忘れてしまい、貧しさをこの上ない不幸と考へ25年間毎日の生活を呪っている。さほどでもない実家の家系を鼻にかけ、常に‘majestic’にふるまいつつ、それでいて、“You are master here, R. W.,”…“It is as you think; not as I do.”<sup>33)</sup>が彼女の口癖である。貧乏なるが故に下宿人を置かねばならず、下宿人が階上でずしずし歩くのも我慢しなければならない。娘がごみ集取業の成金の世話を受けねばならぬのも貧乏故である。これが結婚記念日となるといっそう陰悪になる。いくらでもより良い結婚ができた若い時のことを思い出し、いまいましてはいっそう増大し、ますます威丈高にふるまい、ひねくれた調子になる。この威丈高な調子は歯痛によってますます高められる。ディケンズのユーモアである。また、父母に背の高い人と結婚するようにいわれたにもかかわらず<sup>34)</sup>、‘a little man’と結婚して、失敗であったことを悔やむあたりにもディケンズのユーモアがある。このあたりには作者の母の後悔が形を変えて表わされているかもしれない。

一方夫はあどけない童顔の小男で、上下の服、靴をいっぺんに新調することが夢であるが、それができない貧乏事務員である。不満の塊である夫人との結婚を今もありがたく思ひ、夫人の気嫌をとりつつ満足している。こうした父に娘のペラは心から同情し、愛している。この娘は婚約者、それも、自分の意志によらぬ婚約者が死んだと思ひ、自暴自棄になっていたが、ポフィン夫婦の世話になり、下宿人でポフィン氏の秘書のロークスミス、実は死んだと思われていた婚約者に求婚されると、母の反対を恐れて愛する父のみに打ち明け、幸福な結婚をする。果して、母は「乞食坊主」(a Mendicant)に身をまかせたと腹を立てる。

やがて、相手は大金持とわかり、裕福な生活をし、彼女の理想は実現したのだが、心まで毒された夫人は娘の幸福を素直に喜ぶことなく、不気嫌に受け入れたただけであった。

これら3人の母親たちはもちろん作者自身の母親ではない。しかし、この3人には作者が自分の母親もしくは一般の母親に対して、感じたり、観察したりしたものを体現させていることは間違いない。ニクルビー夫人の見栄、自惚れ、脈絡のない果しない饒舌。ミコーパー夫人の現実離れた判断と発想法、それでいて、夫に付き従う素直さとしたたかさ。ウィルファ夫人の不平とひねくれ、奢りと卑しさ。こうしたものは作者が母親像、女性像としてとらえたものであり、その一番の見本は自分の母親であったろう。

デイヴィッド・コパーフィールドの母は、彼が生まれた当時、20才足らずで、夫の伯母からは‘ろう人形’と見放され、自分でも‘赤ん坊母さん’と叫んでいる、何もできない、すべてに自信が持てない女性であった。こうした主婦失格の性質は作者の妻キャサリンをはじめ他にも手本はあったと思われるが、小さいデイヴィッドに勉強の手ほどきをしてくれた母とそれを監視したマードストーン嬢は作者の母と作者自身の子どもへの姿勢が手本になっていると考えられる。課題の出し方は作者自身が子どもに課したものがあろうという。

また、デイヴィッドの母が教会で知り合ったマードストーン氏がデイヴィッドを散歩に連れ出した時、デイヴィッドの母が会話を根ほり葉ほり聞いたがり、‘Bewitching’、とか‘pretty little widow’とか話されていたことを知ると、「そんなことないわね」などいつつ嬉しそうにするあたりは<sup>35)</sup>、いつまでも年寄りと見られることを嫌ったという作者の母の姿が映し出されているといえよう。

#### 4

これらの好ましからざる母親像を強く心に焼きつけられれば、それだけ他方で理想の母親像も形づくられてゆくものである。事実、そうした理想像はディケンズの初めの作品から現われている。『ボズの素描集』(1836)には「マンモス街での瞑想」という小品がある。マンモス街は流行のごみ捨て場といえる古着店が多くあり、そこを散策していた作者はふとある店に同じ出所と思われる一まとまりの古着を見つける。子ども服のつぎ当て具合、ポケットの汚れ具合、インクのしみの様子、父親のものと思われる大人服の上げの仕方、成人した後の服の大きさ色あいなどから、ある男の子が母親に期待されて学校に通い、やっと給仕の仕事にありついたものの、親の期待に堪えられなくなり、悪い仲間に入り、酒場に入り浸り、もはや年老いた母の嘆願にも耳を貸さず、最後の荒布のコートは刑務所用のものであることから、この着用者が極刑に処せられ、この世を去ったことを推察する。もちろんこれは事実ではなく、作者が自分になっていたかも知れない境遇を店の古着に托した連想の産物である。作者は「自伝的断片」において、家計が窮迫し学校へ通えず、され

ばとって、良い働き場所もなくロンドンの盛り場をうろついていた頃の自分について、つぎのようにいっている。

I know that I have lounged about the streets, insufficiently and unsatisfactorily fed. I know that, but for the mercy of God, I might easily have been, for any care that was taken of me, a little robber or a little vagabond.<sup>36)</sup>

もちろん、この男の父親は何らかの事情でいない。そのため、母親は苦勞して育てねばならず、自分の不足勝ちな食事をなお切りつめて育てあげたあげくの果てに息子に裏切られ、失ってしまったと考えられる。

同じ型の母子は『ボズの素描集』の「黒いヴェール」にも描かれている。開業したばかりの若い外科医の所へ、荒れた天気、しかも、深夜に生活の苦勞の重ねたらしい喪服の背の高い、やせた中年女性が訪門した。思いつめた様子のその女性の話は要領を得ないが、とにかく翌朝ロンドンの外れの、いかがわしい人たちが住んでいる地区への往診を約束する。翌日約束の時間に行くと、その婦人は人を使って重たい荷物を運び込ませる。それは絞首刑にされた男の遺体であった。それは言うまでもなく生命はこときれていたが、苦勞して育てた母親としてはなお諦めきれず、外科医を招き、生命回復の努力なしに埋葬するに忍びなかったのだ。この小品は深夜から早朝までのほんの十時間足らずの間の出来事に過ぎないが、背後には30年ほどにわたる母親の苦勞、1人の息子に期待をかけ、それが人生の唯一の目的であり、支えであった母親の悲しみが示されている。子どものためにすべてを、命さえも捧げて惜しまぬ純粋な母の愛、理想的な母親像、これがディケンズが求め、憧れたものだった。

同質の愛は『バーナビー・ラッジ』(1841)にも描かれている。この作品は1780年に起きた、ジョージ・ゴードン卿の狂信的な反力トリック暴動事件を取扱ったものだが、早くより作者の胸中にあった。それがなかなか結実しなかったのは作者が納得する中心主題がなかったからである。当初はヨーマンのゲイブリエル・ヴァーデンを中心に考えていたが、中心にバーナビー・ラッジ母子を置くことにより、作者の心は活発に動きだし、作品化したのである。

今度の若者は罪人ではなく、回復することのない知恵おくれの若者である。これは終身刑の罪人と等しい重荷である。快活で美しい娘であった、バーナビーの母は、22年前の主家の謎の殺人事件に巻き込まれる。彼女の夫はウォレン屋敷の家令で、主人とともに園丁に殺されたと考えられ、主家より年金をもらって不運な息子と諦めと忍耐のひっそりとした生活に入っていた。その生活は母こそ唯一の息子の支えであると同時に、白痴の汚れを知らぬ息子の幸福こそ唯一の願いであった。しかし、この静かな生活は残酷にも踏みに

じられる。ある夜男が訪ねてきたことにより、彼女の心は恐怖でいっぱいになる。男は殺されたはずの夫であり、それによって彼女は夫が真犯人であり、もはや主家からの年金による生活が不可能であることを知る。そして、息子に極悪人の父の存在を知らせないよう心を砕くが、男は彼女に付きまとい、金をゆすり、子どもの存在を知るにおよんで、いっそう激しく強迫する。いったん田舎へ隠れて生活するが再び見い出され追求されたために、再びロンドンへ身をひそめるために戻った時、ゴードン卿の暴動に出会い、バーナビィは扇動者たちに金持になれるといわれ、知恵遅れながら母思いの若者は母の制止を振り切り暴動に加わる。

やがて、秩序回復のための軍に捕われ、牢において父と再会する。その間再び暴動が拡大し、牢が暴徒によって破られるが、再度逮捕され、バーナビィは死を待つばかりになる。母は薄幸な息子のそばにいられるだけいて慰める一方、夫にはもはや死はまぬがれないのだから、大罪を告白し、神の怒りを解き、呪われた一家の罪を軽くするよう嘆願する。その代り残りの時間を妻として心から仕えることを申し出るが拒否される。そこには極悪人としてのいさぎよさが感じられる。一方、母子を憐れむ人たちはバーナビィの助命に動き、主家の後継者のヘアデル卿らの努力で、処刑寸前に特赦が発せられ、母子の静かな生活に戻る。この間の知恵おくれの息子の幸せを願う母親の必死の気持は読者にひしひしと感じられる。息子にはそれが十分理解できないためになおいっそう哀れをさそう。それでいて、息子は息子なりに母親を幸せにしようと思っている。作者はここに母子の理想像を描いている。たとえ白痴であろうと、母たるものはひたすら子を思い、その為には命を喜んで投げ出すのが作者にとっては親のありうべき姿なのである。『リトル・ドリット』のアーサー・クレナム母子はまさにこれと逆の立場を描いている。しかし、これはあまりにも不寛容な、子どもからの一方的な願望であるといえる。

『デイヴィッド・コパーフィールド』のペゴティ氏の愛も血縁こそないが献身的な親の愛である。友人の妻を引きとり、兄の子ハムを引きとり、義弟の子エミリーを引きとって育てたペゴティ氏の度量は同じく作者の理想を示すものである。特にエミリーに対しては、実の親以上のもので、スティアフォースとの駆け落ちを知ると、すべてを捨てて英国本土はもとより、大陸までも出かけ、乗物代・食事代はエミリーの後の生活のために切り詰めるだけ切り詰めて、ほとんどを徒歩で探がしまわり、とうとう捨てられたエミリーを見い出した。その執念にはすさまじいものである。その後はエミリーの気持を考えて、知る人のいないオーストラリアへの移住を決意するという徹底した献身ぶりである。こうした愛こそが作者の理想としていたものであり、それが自分に向けられることを願っていたものであった。

## 5

これまで、チャールズ・ディケンズの母親像を現実および作品の中に見てきたのであるが、その理想的母親像の出没には奇妙な現象が見られる。処女作『ボズの素描集』に「黒いヴェール」にあるごとく理想像が出されたことは意味深い。つぎの出世作『ピックウィッククラブ遺文集』では作品の性質上母親像は出て来ない。つぎの『オリヴァー・トウスト』では母なしの構成で、本能的な母親像で実体はないが、神聖なものとして存在する。つぎの『ニコラス・ニクルビー』で初めて母親像を現実からとり、具体化することにした。この点で実在性はかなり増した。つぎの『骨薫店』では母の存在はなく、あるのは祖父と娘、しかも、祖父を導く娘の関係が示されている。そして、つぎが『バーナビー・ラッジ』であり、ここでは理想的な母親像が示されているのである。『ドンビー父子』では母の存在は小さく、それに代る乳母は不十分だし、美しい義母はその役目を自ら放棄する。『デイヴィッド・コパーフィールド』ではデイヴィッドの母やミコーバー夫人に不完全な母親像とともにペゴティ氏のごとき理想像も示されている。『荒涼館』で示されるのはアフリカ救援活動に熱中し、現実生活を無視する姿である。『二都物語』、『大いなる遺産』においても母親像は重要性なく、後退してゐる。『共通の友』では不平の多い母の現実像が示されている。『つらい世』においては断片的な母親像が示されている。まずルイザの母グラドグラインド夫人である。小柄で、瘦せた、目のしょぼついた女性で、想像力は皆無である。しゃべり出すと止まらないが、自分の立場を心得ていて、自分の意見は出さず、娘の結婚後この世を去る。

こうして見ると、中期までの作品においてはほぼ交互に母親の現実像と理想像が取り上げられている。これは作者の心の中にそれだけ大きな存在として母が存在したということに他ならない。その後は現実像の母が時々描かれる。そして、比重は軽くなり、関心の度は薄れ、中心は男女関係がより重要性を増したといえるだろう。

もう1つ注目すべきは『つらい世』のバウングビの母である。彼は早く母に捨てられ、祖母にも邪険にされ、傷つき大成したというのが口癖であった。しかし実際は子ども時代この上なく大切に育てられ、彼の出世後母は年に1回お金を節約して町に出て、息子の繁栄ぶりを見て安心するという生活であった。この母親像は極めて異例である。なぜ母親に捨てられたと言いふらさなければならなかったのか。

私はここに作者がそれまで抱えてきた自分の母親像への反省を見る。1851年作者の父ジョンは他界した。その時まで、母は父とともに借金を繰返し、作者に迷惑をかける共犯者であった。息子の名を使い出版社から借金をしていたこともあった。しかし、いざ父に死なれてみると、とり残された母には憐れみの情を禁じ得なかった。だから、父の残した



借金を支払い、身柄を引き受けることを母に明言している<sup>37)</sup>。それまでの自分を見ると、母を悪者にして、出世したといえる。時には父母の借金に腹を立て、父母を田舎に追いやったこともあった。これは母に年30ポンド与えて自分の前に現われないようにさせたバウンダビィ氏と同じではないか。父の死の折改めて母を見て、一時的にもせよ、作者は自分の母に対する態度を反省し、こうした母親像を作り上げたといえる。これは、それまでの母親に対する態度を見てくると、さほど無謀な推論ではない。

『リトル・ドリット』のものはや中年に達したアーサー・クレナムは20年以上の中国滞在後わが家に帰ったが、学生時代同様母に歓迎されるどころか、長年家を牛耳ってきた家令に、安息日の旅は母親が喜こぶまいといわれて、つぎのように思う。

“How weak am I,” said Arthur Clennam, when he was gone, “that I could shed tears at this reception! I, who have never experienced anything else; who have never expected anything else.” He not only could, but did. It was the momentary yielding of a nature that had been disappointed from the dawn of its perceptions, but had not quite given up all its hopeful yearnings yet.<sup>38)</sup>

作者もアーサー同様いつまでも母親の愛の不足を忘れられず、期待した。それが恨みとなり、時として、嘲笑となった。それがやっこの段階で心の重荷ではなくなり、その重圧から解放されたのである。

#### Notes

- 1) Christopher Hibbert, *The Making of Charles Dickens* (Middlesex : Penguin Books, 1983) p. 141
- 2) Edgar Johnson, *Charles Dickens, His Tragedy and Triumph, Revised and Abridged*, (New York : Viking Press, 1977) p. 92
- 3) *Ibid.*, p. 91
- 4) John Forster, *The Life of Charles Dickens*, vol. 2 (London : Everyman's Library, 1980) p. 199
- 5) Johnson, p. 127
- 6) *Ibid.*, p. 111
- 7) Charles Dickens, *David Copperfield*, (London : Bradbury & Evans, 1850) p. 44
- 8) *Ibid.*, p. 318
- 9) *Ibid.*, p. 274
- 10) *Ibid.*, p. 590
- 11) Forster, vol. 1, p. 51
- 12) *Ibid.*, p. 52
- 13) Angus Wilson, *The World of Charles Dickens*, (London : Martin Secker and Warburg, 1970) p. 74
- 14) Forster, 1, p. 26
- 15) William Somerset Maugham, *Ten Novels and Their Authors* (London : Pan Books, 1978) p. 131

- 16) Stephen Wall ed., *Charles Dickens*, (Middlesex : Penguin Books, 1970) p. 160
- 17) Lord David Cecil, *Early Victorian Novelists*, (London : Constable and Co., 1945) p. 30
- 18) Wall, p. 58
- 19) Charles Dickens, *Martin Chuzzlewit*, (London : Hazell, Watson and Viney) p. 7
- 20) Forster, 1, pp. 12-13
- 21) Wall, pp. 264-265
- 22) Hibbert, p. 4
- 23) Johnson, p. 193
- 24) *Ibid.*, p. 28
- 25) Forster, 1, p. 21
- 26) *Ibid.*, p. 22
- 27) *Ibid.*, p. 32
- 28) Charles Dickens, *Christmas Books* (London : Chapman and Hall, Chales Dickens Edition) p. 212
- 29) Centenary Exhibition Committee, *Charles Dickens*, (London : Lonsdale and Bartholomew Printing, 1970) p. 1
- 30) *Martin Chuzzlewit*, p. 7
- 31) Charles Dickens, *Nicholas Nickleby*, (London : Chapman & Hall, 1839) p. 20
- 32) *David Copperfield*, p. 123
- 33) Charles Dickens, *Our Mutual Friend*, Vol. 1, (London : Chapman & Hall, 1865) p. 26
- 34) *Ibid.*, Vol. 2, p. 29
- 35) *David Copperfield*, p. 19
- 36) Forster, 1, p. 25
- 37) Michael Slater, *Dickens and Women*, (London : J. M. Dent & Sons, 1983) p. 12
- 38) Charles Dickens, *Little Dorrit*, (London : Bradbury And Evans, 1857) p. 24